



“^し浸み^だ出す授業”への志、あるいはその失敗談？

—「研究室」と「現場」の間をさすらう幾つかの試みから—

国際学部 奥田 孝晴



93年に国際学部へ赴任。専門はアジア経済・開発経済学。「国際学入門」、「現代世界経済論」、「アジア太平洋経済論」、「開発経済論」担当。前職が高校教員(社会科)だった関係で、教職課程「社会科(地歴科・公民科)教育法」も。国際社会、特にアジアの人々との“かかわり”をライフワークに「タイ・バングラデシュ研修」引率や公開自主講座「アジア現代史共通教科書編纂研究会」(後述)等にも関わる。無趣味だが、敢えて言えば“シンガーソングプロフェッサー”、および名古屋人の典型的熱病・中日ドラゴンズフリーク(これも後述)。(おくだ・たかはる)

大学の授業とは、初等中等教育で蓄積あるいは構造化されてきた「知」をいったん解体し、再編成することを目的とするものであろう。無意識に備わっている常識や物事の見方に知的揺さぶりをかけ、多元的に見る力(他者への想像力)を養い、自立した人間としての価値観・人生観を作り上げていくための“お手伝い稼業”こそが、大学人としての教育的使命である。その一環として、身近な地域社会から世界諸地域までの「現場」とかかわり、そこへ“浸み出して”いく教育実践を模索している。本文はその中間的報告(あるいは失敗談?...)。

1. 講義とゼミナール—研究室の光景から

超ユニークな授業を期待しておられる諸兄にはのっけから拍子抜けさせて申し訳ないことだが、私の通常の授業やゼミナールスタイル・手法は、多くの先生方のそれと、おそらくそれほど変わったものではないだろう。シラバスに応じた講義、専門文献の読破、学生諸君の発表、意見と討論、それに卒論指導等を中心として、日々の授業は進んでいく。時として、興味動機付けのために導入教材としてギターライブ(学生諸君には“雑音”かもしれない...)で主題関連ソングをご披露するといったパフォーマンスを例外とすれば、

国際学部での私の授業風景は、ありふれたものである。

ごく一般的じゃないと言われるかもしれないが、「学問に王道は無い。」もともと学究活動とは地味だが着実な努力、あるいは粘り強い忍耐力が無ければ真に自分のものとはなりえない。知識、定義、理論を取り上げ、その問題点を洗い出し、忌憚りの無い意見が交わる“知的な公共空間”を作り上げることこそが大学教員に与えられたプロとしての義務である。独善に陥ることを戒めつつ、また学生に迎合することなく、知の対決を挑むとき、真に充実した「良い授業」が成立しえる

のではない。秩序と整頓を欠く研究室ではあるが、ここは知の公共空間であり、またそうした対決の場でもある。したがって研究室は誰にでも開かれており、ゼミ学生以外にも、少なくない学部生・他学部生、また留学生や学外の老若男女が入り出りを繰り返す。疑問・質問には分かれば答え、分からなければ共に考え、諸々の意見・主張に反応し、時に自分自身が学ばせてもらう。ここで展開される多様な教育活動に支えられ、専門研究とかかわりから帰納され、演繹して生まれる価値観や理論は、国際学部の「現場」としての国際社会（もちろんそこには足元の地域社会や文教大学自体も含まれる）を解析し、自分たちとのかかわりを探るための基点となる。決して派手でもなく、またウケの良いものではないかもしれないが、「研究室からの視点」を研磨することこそは、大学授業の根幹であろう。

2. 国際学入門：「知の再編」の現場

国際学部では学部新入生全員を対象とする必修科目「国際学入門」があり、私は4年前から若手の3先生と共にここに関わらせていただいている。授業は通常は2人、時としては4人での共同となり、またしばしば演奏家や小学校の先生など、学外からのゲストを招いての、まさに“ゴツ煮的”一専門領域に固執せず、そこから積極的に浸み出して他のそれらと関わろうとする方向性を、しばしば「学際的」と呼ぶ一総合授業である。

国際学というのは体系性を備えた学問とは異なり、“若く”、しかも豊富な内容を含んでいる。世界65億の人々が生活を営む地球という惑星は、いま数多くの困難や問題に直面しており、それらの解決をこころざし、叡智を集めて「より善く、共に生きる」ための方途が求められている。世界中の人々の生き様に対する想像力を働かせ、自・他のつながり、係わり合いを再考し、望ましい関係性を求めていくことこそが、国際学の課題である。

「国際学入門」はそうしたことに関わる知の蓄積と再編の現場でもある。1492年以降の世界の“一体化”、アジアと日本、歴史認識、

憲法9条と安保条約、第三世界の貧困問題…扱うテーマは多様だが、授業では学部両学科や国籍の区別無く、予め決められた小グループによってディスカッションが行われる。それが生み出す認識・価値観の交換が時としてシナジー効果を生み、学生諸君はこの学部での今後学習すべき課題を自らの立場で設定することを促される。（もっとも、このことが理解できない学生たちにとっては授業は苦痛だろうし、一部からの嫌悪や反発は当然覚悟しなければならない。）この授業は国際学部の知的イニシエーションであり、地球の「諸現場」とのかかわりから見えてくる知的課題は、教員にも更なる専門的研究を要請する。この講座を通じて、「国際学」の知的構成と体系化を作り出す様々な学術的成果（戸田・藤巻編著『グローバル・スタディーズ』、拙著『国際学と現代世界』ともに創成社刊等）も学部から生まれつつあり、新しい学の創造という知的にも面白く、取り組みがいのある挑戦へと私たちを誘うのである。

3. 教職課程とのかかわり

学部での教職課程とのかかわりは社会科・公民科免許スキームが作られた2004年度からである。湘南校舎では既にその前年から情報学部で情報科に関する教職課程が出発しており、同学部の柳生先生を中心に、今ではキャンパス全体での教員養成に取り組んでいる。夏季の富士山登山を中心とした体験合宿、春季の学習合宿などを率先して企画運営される柳生先生のご指導の熱心さ、学生への薫陶にはただ頭が下がる思いだが、私は主に合宿への協力と社会（公民・地歴）科教育法4コマを中心に、課程学生と結構深くかかわっている。

授業では戦後社会科教育の歩みやカリキュラム概説、指導案作成や模擬授業といった内容だけでなく、戦前の朝鮮や「満州国」の教育制度や発展途上諸国でのインフォーマル・エデュケーションやマイクロクレジット活動による「民衆の自立運動」など、今日の教育にかかわる課題を世界大の視点から考えていく事に気を使っている。さらに、授業時間

を振り替えて靖国神社や鎌倉など、地歴・公民的題材としての舞台に出向き、「現場」からの視点を大事にする事にも留意する。子供の生き様にかかわりあい、彼らの自立を支える資質を備えた教師、国際学部教職課程生にふさわしく、世界から地元を考え、また地元から世界に向かって行動できる教師、それこそが彼らに「期待される教師像」である。(ちなみに、おそらくそうした教師は自分の事よりも子供たちのことに一生懸命で、世俗的な“立身出世”とはあまりご縁が無いだろう。しかし、そうしたものを求める人はもともと教師になどなる必要はないし、ヒラメ教師は子供たちにも迷惑だろう。つまり、私が目指す教職関連授業は「出世しない先生」を教壇に立たせることに尽きるのかもしれない。)

4. 「アジア研修」：第三世界の現場へ

1997年頃から、現地での行動が比較的容易で参加者の健康管理にも目が配れる乾季(12月)を狙って、20名程度の学生諸君とともにタイ、バングラデシュを訪ねる事がほぼ恒例行事となっている。「タイ、バングラデシュ研修」(通称「アジア研修」)は、大学国際交流委員会が主宰する全学的海外研修プログラムで、06年度ではや11回目、参加した5学部学生の延べ人数は200名を超えた。学部を超えた参加者達はそれぞれの知的バックグラウンドから今日見たこと、体験したことを自分なりに消化し、また新しい友人たちとの生活や意見交換を通じて、異なった見地からの刺激を受ける。「アジア研修」は知的興奮が連続する学際現場である。引率業務は確かにシンドイが、



アジア研修：バングラデシュの農村

4年前から引率指導にご一緒していただいている人間科学部の秋山美栄子先生は高齢者福祉の専門家であり専門分野からのご指導のみならず、学生の健康管理にも細やかな気遣いをしていただいている。

世界は広く、かつ多様である。「アジア研修」の眼前には貧困や低開発にあえぎつつも、なお逞しく生きようとする数十億の個性が日々の暮らしを営む時間が広がる。第三世界と呼ばれる「異世界」の実態に接し、またそこで生きる人々と直に向き合う事によってしか、私たちにとっては真の意味での「国際理解」も「国際交流」もありえない。教育、福祉、開発、社会的自立、宗教、文化といった諸々の切り口をもって、世界の「現場」に浸み出して行く試みは、参加した学生たち自身の自立意思を刺激する。ある学生は現地の社会事情への理解不足を反省し、発展途上国研究を課題に選んだ。ある学生は、現地NGOの活動に触発され、海外でのボランティア活動により積極的にかかわるようになった。ある学生は、国際関係をより身近にとらえるようになり、平和学に関する会合などに参画するようになった。そして、ある年次の参加学生たちは現地の非公式教育の学校建設に手を貸すために、キャンパス内だけでなく地域社会を飛び回り、1年がかりで60余万円の募金を集めて現地のNGOに手渡している。(ダッカの下町に建てられつつあるその校舎には、そのことを示すプレートが文教大学の名とともに刻み込まれている。)この旅がもたらす自己変革のモーメントは決して小さなものではない。

5. 公開自主講座：『アジア現代史共通歴史教科書編纂研究会』

「浸み出す授業」の新たな試みとして、05年のアジア各地での“反日暴動”を契機に始まった「アジア現代史共通歴史書編纂研究会」の活動を取り上げさせていただく。湘南キャンパスに在籍する100名余の留学生諸君(その多くは中国や韓国の各地から来ている)、日本人学生、さらには世代を超え、「歴史認識問題」に一家言を持たれているご年配市民たち

…月 1 回のペースで行われる研究会は、国籍・民族・年齢・職業等の区分を一切排除した老若男女の自由闊達な話し合いの場である。参加者には事前に準備される日・中・韓の歴史教科書コピーが配布され、事前に読破しておく事が求められる。そのうえで、特定の事件・テーマについてそれぞれの見解が披露され、ときには論争が起こる。それはまさに歴史認識とそれに象徴される国家観、民族観、社会観の衝突とその止揚への試みである。

正規授業時間への配慮から、開始時間は午後 6 時 20 分、交通不便の湘南校舎では物理的ハンディも大きい。またここには単位の認定も無く、世俗的な意味での“メリット”はほぼ皆無である。しかし、「学ぶ事はやはり面白い」のである。「学びたいから学ぶ、ただそれだけです、ハイ」というこの公開自主講座的研究会は 06 年秋学期で 10 数回を数え、前年度の記録公開に続いて第 2 集を準備中である。留学生や市民を交えた歴史教科書研究会は地域社会への浸み出しだけでなく、東アジア共同体への浸み出しにも、また「学」の目的自体のそれにも拡がっている…



「教科書研究会」での議論

6. 蛇足ながら…

最後に蛇足ながら、これは全くの趣味世界に属する事柄ではあるのだが、名古屋生まれの名古屋育ちである私は中程度以上の中日ドラゴンズ病患者であり、しばしば球場に足を運び、ドラTシャツに身を包んで『燃えよドラゴンズ』を熱唱しないと症状が落ち着かない。ドラゴンズの勝利は確実に私の気分（したがって教育的環境？）を快適にするので、学生諸君にもかならずしも迷惑なことではな

い、などと勝手に思っている。最良チームを応援することを通じて素朴な「愛郷心」の所在を考えさせ、日本特有の「野球」観戦を通じて異文化理解にも役立つだろうなどと、これまた勝手な解釈を立て、最低、年に 1 回はゼミナールや教職課程の学生諸君、それに留学生諸氏にも呼びかけて「ドラゴンズ応援ナイター観戦 in レフトスタンド in 首都圏球場」（長ったらしいので、通称「プロジェクト D」と呼んでいる）を実施して、06 年度で 9 回目となった。ゼミの学生諸君は「やれやれまたか」という表情を浮かべつつも、小まめに私に付き合ってくれるし、留学生諸氏の中には初めて野球を見るという者も少なくない。日本社会の一側面を体験するのも悪くは無い、というのはかなり強引なこじつけには違いないだろうが、これもまた「現場への浸み出し」行為に加えて欲しい事項ではある。

蛇足に蛇足を重ねたい。文教大学には尊敬すべき多くの諸先生がおられた、あるいは今もおられるのだが、そのうちの一人が人間科学部におられた市川孝一先生である。同先生は知る人ぞ知る熱狂的西武ライオンズファンだが、2004 年の我がドラゴンズとの日本シリーズの折には、わざわざ私のために所沢球場での第 5 戦という得難いチケット、しかも先生には絶対に必要性が無い 3 塁側（ドラゴンズサイド）のチケットをお譲りいただいた。相手チームフリークに対して市川先生が示してくれたかくも寛大なご親切とフェアな精神、これこそが『人間愛』の実践であるとして、深い敬意を表する次第。文教大学は本当に良い大学だな、と思った瞬間である。（了）



プロジェクト D in 神宮球場